

若女形之部

風雅 函 嵐小六

**ヒイキ** ヤレ吉田屋の玉さまく。**頭取** 当時暦々の若女かた衆もムリ升れど、代々乃名家といひ、殊二小六丈は岩次郎と申せしはつ舞臺より大立もの乃器量備わり、女かたを情を守り、行義といひきやりうといひ申は此お人、其上、(14)去秋故人と相成られましたる京都ひかし山の俳士、土卯先生の門人にて、ふう雅の道を好ミ、常に閑情を楽しシミと致され升る。**南** 去春までハ九郎右衛門町乃貸座敷に居られ升たが、夏の頃よりこちら側、河作の東へ変宅にて、専妙膏といふ膏やくの根悍、唐画の異ふうナのうれんも風流から出た物好き。**頭取** 成ほど雅を好まるゝ故、居間のかけもの柱がけには、其時々の發句の短冊をかけて樂シミ、近頃ハ大分達者に成られ、ぶたいもつゝゐての御出勤。**見物** しかし手も自由に成らぬうへに、纏足をしらるゝほどふか見て居てあぶないわい。**上丁** こちらのぬしやどのへ毎日通われ、神佛の加護より「入かたの駕籠にて、按腹の療治のきゝ目が見え、追々に全快て有ふ。**南** 去春伯父庄六殿の死去の砌、小ばしの墓所へ乃葬送りに、正八ツ時の釈迦兒ひとハ珍らしい。往来の諸人か不思議を立ました。**しやれもの** 去年の春から、乗物より(15)かご細工の釈迦になひが大はやりじや有た。ハハハハハ。

頓智 函 中村歌六

**ヒイキ** 周防町の太夫に頓智といふ位ハどふじや。**頭取** サレハ哥六丈ハぶたいの取廻りが達者故、頓智といふ位を付ましたが、舞臺ハ平日とてもヒフを着て樂屋入など、たつしやなひふじやといふ人がムり升。**丸口** 達者なひふかしらぬが、やはり女かたは女かたの姿にてしほらしふしたがよゐよふにおもわれる。平日ちと気づいとの噂。**鶴菱** 本家の親玉乃おもわくにしたがふが能かところらハおまふて居る。しかし今出の花かたじや。**頭取** ソリヤ其はずじや、中の嶋の舟越氏がヒイキゆえ、干牛丸の仕送り、周坊町にも看板か出してある。どふテも干牛丸の精力故か、御子息も沢山に出来孫のふるを、今宮の隠居ハ嘸お悦びでムり升ふ。」

今様 函 中村松江

**頭取** 松江丈ハ市川熊太郎と言、いなりの芝居へ出勤の頃より當世の人氣にかなひ、今大立もの乃氣質故、樂屋乃行状けいこの砌りより、長きせるにて煙草盆を扣へ、ひろうどうの大座ぶとんに座し、気性高く狂言も少し嗜なまるゝよし、それ故今様といふ位にいたし升た。**皆** コリヤ頭とりの御はたらき、いひぶんハないぞく。**ヒイキ** 愛が有てひんがよふて、巴丈ふうがどこやらに

見へるぞくすきく。

端手 閩 藤川花友

〔頭取〕花友丈は道とん堀にて出生ながら、鰻十郎丈と同道にて江戸表へ下られ、先年帰坂致されても、やはり江戸の気風離れず、始終杜若丈の行「ミ」を地として、御酒も大ぶんゆき升故、はでといふ位を付ました。〔南〆〕内室は江戸萩の伊三郎丈の娘ゆへ、江戸訛りも少しませり升。

〔ハル口〕藝中言葉きれの戻々に、スフクといふけたいな声交るのがおいらハ耳二立。また茶屋から茶屋への梯子さけ、あれもやつぱり杜若丈を「して居らるゝか。〔頭取〕サア其端手が有故、ぶたいも地もきれいに申分なし。やがて江戸表へ帰られたら大立ものでムリ升ふ。〔皆く〕六條の御堂が聞てあきれる。ハハハハハ。

美景 閩 あらし富三郎

〔南〆〕さけも可なつて端手の有のハ、花友丈より富丈の方じや。なぜに富三丈を上席にせぬのじや。〔頭取〕此評前ニ、上座の下座のといふ甲乙ハムりませぬ次第不同、花友丈ハ杜若丈の端手を専一とし、また嵐富丈ハ少しお酒を上ツテも可愛らしうを専らと致され升る故、美景といふ位を附ケましたハ、持まへの御器量のうつくしき、美景でハ御ざりませぬか。〔狎坊〕狎抱て座ぶとんのうへにすわり、長きせるで南草のんでじや處ハ、とんと北辺の妾宅さんを見るやうなわいなア。〔ヒイキ〕杏江丈のゆすりハ可愛らしうてよいぞ。

花實 閩 澤村國太郎

〔濱見物〕ヤレ大場待て居た。〔芝い好〕いづぞやハ無分別で立役に成りかけ、蹴抜の塔から飛んで怪家まで被成たが、元来ぶたいハ申及バす、地の行義がらが女形の情をはづさぬ可愛らしい所ハ外ニないぞ。〔頭取〕「夫故花実と申位をつけ升たも狂言の仕内、平日の行状花実相對の申分なき人故、俳優道にての名家、沢村國太郎といふ結構な名苗氏譲り受られしハ、其身の大慶と申もの。〔ヒイキ〕夫も日頃信仰の弁才天の御利生で有らふ。〔西〆〕去々年大西の仕内被成た梅枝さんハ、此太夫がきつひいいき、追々の御出世故、嘸およろこびで有ふ。〔楽やシリ〕イヤ又狂言の上手な斗じやない。立も自身に付ケふり附が御功者、琴、三味せん、鞆弓の三曲ならムれく。〔頭取〕常精を禁酒して、弁天を祈り藝道を励るゝ故、頓与大立ものと昇進ハまたく内でムリ升。

閑情 閩 嵐加なふ

芝い好 小六丈の門弟から今離寛丈乃苗氏をもらひ、名を加納と致されしハ、とふり分らぬ為じや。  
頭取 小六丈乃嵐も、岡しま屋の嵐も元祖は嵐三右衛門、勘太郎兄弟の分れにて、さして替りはムリ升ぬ。しかし今離寛丈の嵐を名乗り、紋所ハ可といふ字ヲ三ツ吉まがひにして用ひられ升るハ、両方捨ぬころてかなムリ升ふ。  
ハルロ なんぼう名苗かえても「声かかひなふて、加納でハなふて、かいなふじや。  
エイキ 声がなふても狂言に申分ハないわい。  
頭取 東西く、今日ハ狂言の評ハ御無用。此お人ハチト花が薄イと申ハ、全躰うむしやうなころにて、其上近ころハ、當時の流行もの家相方位など松浦先生そのけにて、かよふの事ニつてムる故、自然とぶたいか淋しふなる事もムリ升ふなれど、藝品定ハ八文舎へ譲り、さらば次の評にかゝり升ふ。

気性 國 市川門之助

エイキ 可愛らしひ門之助なら何ぞ優しい位でも有そふな物を、気性とハどふやら女形でハなふて、立役めいた位じやないか。  
頭取 成程気性といふてハ強ふ聞へ升るが、全躰門之介丈の氣質、町方の娘といふて見よふなら、金ひらとう八兵衛とやらいふ仕打、夫故お千代の姉の役など、妹でハしてムれども、眉落したふけ處もしかねぬ氣質、天王寺の上り物の節も蝶々乃うかれなどすなち被 成方ゆへ狂言も達者、そこで気性と付ました、  
エイキ イヤ又琴 三味せんに懸たら、国太郎でも嵐富でも叶やせぬ。  
おだて 酒の方かやつと多らいかく。」

深窓 國 片岡愛之助

頭取 忝しま屋の御子息愛之介丈は外々の女かた衆中と違、二階住居の部屋住の身なれば、別に評もムリ升ぬ。随分おとなしゐそだてがら、大立ものゝお子息で御ざり升。

利發 國 嵐璃光

頭取 中頃ハ中村糸太郎と呼し事もムリ升たれど、當時ハ璃寛丈乃嵐を名乗り。  
楽やシリ 自身の狂言ハ達者なれども、人の狂言をとふのころのといわるハ悪ひことじや。  
おだて どふりで璃光が藝に出ると奇妙々声がかゝらぬ。ハハハハハ。  
頭取 これハおなぶり御無用く。  
エイキ 何ぬかすのじや。何のかのと言もぶたいが見えるからじや。其替り琴は申及ず、哥、三みせんから上るり、三弦、發句も少々ハ東山の土卯の弟子で出来るぞや。

目アリ

一人(白ヌキ) 國 澤村璃苔

〔なたヒイキ〕 璃苔さん待て居た。こちの方の加納さまが、早ふ評が聞きたいといふてじや。〔リセン〕 一

入といふ位の入の字を蔭にした訳、曰有とハどふした事じや。〔頭取〕 此お子、はしめハ芝翫丈の門

人にて中村哥木と「いふて、芝翫丈が江戸中下りの節、北国の旅芝居に勤て居られし事、芝翫く

り毛ニ書記しゝり升。其後嵐氏の引かけにて、其苔丈の苗氏をもらひ。〔六ル口〕 まんまと首尾よ

くへたニ成られ升タ。〔頭取〕 東西く、璃寛の璃と其苔の苔を合して璃苔ト呼び、中の芝居の座本

もしばらく勤られ、追々出情と思ひの外、どふやらしんが留つた様子、そこで一入の字をかげニ

致したハ、女形の情を守り裾からけでしてやりに被。成たら、御器量ハよし、一入可愛らしめも

出来升。またゆたん被。成たら多キなうら腹曰と申ハ爰の所故、随分藝道をお勵ニ被。成ませ。

愛嬌 浅尾徳二郎

〔頭取〕 とく三郎丈ハ初ぶたいの間もなふ中の芝居の座本と成、今に相替らず御勤。〔ヒイキ〕 とふ

やら先の藤川友吉丈ニ似た處が有て可愛らしい。〔頭取〕 夫故愛嬌と申位を付ました。〔南〆〕

象頭山金毘羅様乃撫皮の御世話神慮にも叶ひて、追々御出情て有ふ。

追号 可美無子

同 中山みよし

同 中村恁代

同 浅尾吉二郎

同 浅尾かなめ

〔頭取〕 右五人の衆中の位ハ追々升ふ。まつ眠子丈ハ、八十次郎と申せしときよりハけしからぬ

御成人にて、めきくとお背が細ふ長う成ました。みよし丈ハ来芝丈の引廻しにて、追々の御出情。

恁代丈ハ親御の勢りきで、今年ハ角の座本のおつとめ、追々御出情でゝり升ふ、吉三郎丈、かなめ

丈ハ浅尾氏の所てひようばんいたし升ふ。

洒落 尾上多見之助

同 荻野にしき

同 嵐源之助

〔頭取〕 中女かたの衆中に、洒落と言位を付ました。此お三人ニ限らす惣たひ中女形といふものハ、

稽古もそこくにして、法善寺の土弓引に行、ほうびのうちわ取て悦こんだり、いろくと洒落た

事して遊ぶもの。殊ニ多見之介丈は見立事や口合の上手。〔南〆〕 蝶々の時うさぎのしやれも急

らかった。

▲ 花車 道外之部

器用 澤村徳三郎

勤仕 柴崎臺蔵

篤実 桐の谷権十郎

俠気 坂東國右衛門

〔頭取〕 臺蔵丈八年久しきかぶき乃頭取、夫故勤仕といふ位を付ましたハ、朝未明から打出し迄の日勤は申に及わず、惣連中かたへの念を届ケ、此お人竹田の芝居でなら伊といひ、前茶屋の商内の仕内も至極でいねい、となた様がおこし被 成ても頓与籠抹ハムリ升ぬゆへ、近在からも芝居の見物ハ、處の庄屋殿から指図して、なら伊へくと来り。追々「繁昌でムリ升。桐の谷丈もかぶきてハ古イ頭取、夫故篤実と申位を付ました。坂町にて小間物や店ハ文の塵紙からいろくのあき内、これも追々行込あつて諸事の應對、さばき事をよく致され、生得鳥類、畜類の生ものを飼事に妙を得られ、八まんずしの狎屋といふては、誰しらぬ者もムリ升ぬ。

▲ 惣巻軸

豪傑 〔函〕 中村歌右衛門

〔皆く〕 ヤレ待て居たく。〔靨組〕 靨「組か首長ふして居るといふも久しひものじや。〔北より〕 そり

や其筈じや、當時乃親玉じや故、ソレ京都加茂季鷹先生より〔鶴菱紋〕 丈ハ送られたとて、扇面の狂言ニ

首ながし 口ばしなかし 足ながし よわひもながく よく揃ひ靨

といふ哥を能筆にて書給ふ。芝翫丈か諸藝によく達したとの事故とやらの御ほめなされての悦ひ哥じやとさ。〔京々〕 イヤまだ其上に、去御殿にて今世間で流行するハ何と御問遊され候處、御内の御側遣イの御女中々、芝翫と申哥舞伎役者がはやり升と申された折ふし、雲錦亭季鷹先生筆 御前へまかられたとき、御上さまななんぞほめてやれとの事、夫で〔17〕加茂先生乃狂哥に、

天台の止観しくわんハ四明しめい 當代の芝翫ハ芝居 かざやかしけり

といふ事も聞て居る。〔頭取〕 芝翫丈は天明八申のとし、若太夫の芝居、子供狂言へはしめて出られ、廿四孝の横蔵と、伊セもの語の有「つね二役を出かされ、其ころ子供狂言乃藝品定うない子といふ評義記に、位ハ大上上吉(四文字白ヌキ)としるし大建ものゝ氣ざし、其節か漸々十一才の時。

〔ヒイキ〕 其のち見立すまふにも、東の方乃大関にて位ハ極上上吉、西の方ハ中山一徳位ハ極(白ヌキ)

の上上吉で有た。 **頭取** 夫より座万いなるの宮地を修行有て、大哥舞妓正勤の初め、江戸下りの狂言目録ハ濱杏哥國の著述、芝翫佛のする也。委しくハ殊ニ今日ハ藝評を致さぬ席故、内證ばなしひいき氣質の評ニ懸り升ふ。 **書林** (18)初めの江戸下りの節、堺町乃舞臺にて、千本ざくらニノ切知盛の役、見物と口論出来て額に疵を受られ、其節の即興ニ、

むらさきを かほにもろふや 上江戸の花

といふ発句を致され、夫々江戸中の最肩つよく成たといふ事、これも哥國乃作の、故郷へはれの錦画姿といふ小本二冊の内に書て有が、其後二度目の江戸下りハ、芝翫栗毛とて、哥右衛門自作の少冊、又ハ芝翫帖、芝翫国一覽、芝翫ヒイキ花実知などといふて、色々様々の本乃出る役者ハ、古今にその例かゝり升ぬ。 **狂哥連** 市丸乃社中暁の鐘成が出した芝翫節用百戲通ハ、余程骨か折て有て面白い。 **本スキ** 成程小細工によふ出来てハあれど、アリヤ先に芝居節用集といふものと、江戸から出たきんもう凶彙之臺図會の作の附會、案文もよつほと手傳ふて有わい。 **□□や**

其今度の百人一首ハ不評て有た。 **借本や** 其替り芝翫ミやげ滑稽雲之助咄ハ評がよい。 **頭取** いかさま各々様方の仰の通り、芝翫丈の之著作せし戲書の出版有事ハ、昔から例がゝり升ぬ。尤名人乃衆中目出度ふたい納め致され升か、またハ死去乃後其人々の名誉ヲ著せし書にハ、江戸の事ハしはらく置、京大坂にては、中山由男一代記、慶子画譜、梅幸集、眠獅撰 玉の光、来芝一代記 桐の嶋台、市川の流嵐小六過去物語、嵐雛介死出の山風などて、其身一代の事を一度か二度に著した本ハ出れとも、夫さへ名人と呼ばれし人、昔ハしらず近来の祇園町尾上芙蓉、浅尾為十郎、山下金作、「三保木花桐ハとも角も、あれ程ヒイキ強かりし近頃の中山文七 鬢附や

く」とて、今にひんとこのやつしの藝ふうを残した人さへ、其藝評一代記さへ出ずと仕舞たに、當代の人氣が本ニ移つたのか、何にもせよ珍しゐ事でゝり升。 **芝イ好** ヤソリヤ書物斗じやない。替り毎に錦繪の似顔いふに及はず、其時々ヒイキ連から出るりつばな摺物に讚した發句狂哥。 **橘組** ソリヤ芝翫斗りじやない。岡嶋屋でも同し事じや。 **江戸** ヲそふじやく。また一度も江戸へ下らぬ璃寛をヒイキするやうなれど、東都の戯作者、(19)曲亭馬琴乃作の三勝半七南柯夢もかぶき三仕組、璃寛丈か半七と丹波市ニなられた時と、其後椿説弓張月にて鎮西八郎を勤られた其時と、両度迄曲亭主人か誉詞のりつばな摺ものさへ、はるく江戸から送たじやないか。

**鶴図ヒイキ** (20)イヤすりもの斗りじやなぬ。時々の狂言に寄た芝翫織ハ嶋の内の油丁絆和が玉じや。紙入地、たばこ入、鏡袋地なら好したいじや。 **ごふくや** 芝くわん茶、芝翫柿も流行たが、今年はまだ「芝翫嶋かえらふはやるテ。 **キセルヤ** しくわん嶋張のきせるなら沢山ニ仕入ました。 **小間物や** 芝翫嶋櫛から尺長なら色々ムり升ス。 **ヒイキ** 其外芝翫のし巴、芝翫半ざり、芝くわん駒がた手汐、芝翫ろうそく、芝翫御飯なら千日前から所替して、今ハなんば新地四季のこちら。

〔橘組〕 ソリヤりくわん御飯もあるわい。 〔ツルウ〕 菓子にとりてハつるの子、麩菱、芝翫糖、銘酒につる菱、麩の聲、又ハ芝翫丈の舞扇、(21)日の丸の鉄扇なら平の町壱丁目末廣師麩卯と御尋被<sup>レ</sup>下、多少ニ限らず御用被<sup>レ</sup>仰付<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下升ふ。 〔ハルロ〕 エ、横着ものめが、いつやらハ芝翫といひ分しとじやないかい。 〔本ヤ〕 其義ハ納や町の親旦那かあいさつにて相済ました。右商内物の所書などハ芝翫ヒイキ年代記大成ニ委敷記シムリ升から、御む御覽被<sup>レ</sup>下升ふ。 〔町ふ〕 有為轉變の世乃ならひとて、ヒイキ花実知時代の衆中にも故人に成れた。 〔本ヤ〕 サアそれ故此度改正致しました。ひいきの親玉西喜も過られ升たれと、出冊があれば入舟とやら上町の米や乃旦那、西喜ニ劣らぬひいきじや<sup>レ</sup>けにムリ升。 〔上丁〕 去ル處にまたくえらひヒイキがある。去年乃春もかご細工から天王寺乃開帳と出かけられたと、道て誠ニいろのよひ芝翫茶色の蝶々を見付、手とりにして持て戻、けつかうな金網中へ入て、餌ヲ飼ふものを壱人付置、余所から見せて呉と招請すると、本願寺の御書さま見るよふな四五人警固して見せに行。なんと此やふナ金太郎ノ璃寛ヒイキには有まい。 〔頭取〕 東西く、又々麩橋のヒイキ論になり升た。一向果しもムりませぬ。これハ芝翫丈の細評にかゝり升ふ。 〔見巧者〕 豪傑トいふ位は申分のないよい号ハ、しくわん丈の藝風ハ小六と市紅を腹に持て、塩町政太夫にてせりふのいひ廻しを工夫、遣し文三乃あやつりをよふ飲込んでせらる<sup>レ</sup>故、人形もよくつかひ、上るりも悟られ。 〔南々〕 上るり三味せんでも、歌三味せんでも、琴でもゆけば、鞍弓ハどふか知らぬが、揚弓ハえらいと早嶋の親仁さんもおつしやつてじや。 〔俳人〕 狂哥は東武の(22)蜀山人寝惚先生の弟子と成て、登保斗とやらいふ表とくじやけな。俳諧も大ぶんに出来、手跡も又悟からず「諸方から扇面、短冊などに、自筆乃發句、狂哥を所望せられ、毎日くしようにも氣根によふ書てやられ升。 〔わる口〕 しかし葉見せ乃年玉に、画讚乃扇子を添られるハチト安賣過るじやないか。 〔南々〕 芝翫丈ハ安賣の御家故、狂言も初日から場数をたつふりと見せらる<sup>レ</sup>。諸式直下の時節な 御上乃御意に叶ふといふ物じや。 〔ヒイキ〕 英一蝶乃画風をならわせ、画も大分書とハ扱々器用なお人。 〔俳人〕 英乃画風ハはせを翁さへ学はれたとあるから、芝翫丈も風流く。 〔ヒイキ〕 風流と言イ、當世乃人氣をよくのミ込事もえらいものじやぞ。 〔北々〕 めらひかしらぬが、今度江戸下り芝居ちうニ、去ル北辺の大家の御子息が、ちとした訳で、かけ落とやら出走とやらなされた處か、余ほどの路用金を持ってゝ有た所が、江戸道中にて残らず遣イはたし、やうく壱両もつて東武へ着致され、四五日も逗留の中路用もなくして仕舞、殊ニ彼地ハ無縁ニて誰にかるものもなく、いろくとしんはいの處、折ふし芝翫丈江戸にて芝居中故、御子息もよくく<sup>レ</sup>の事やら、風与ころ附「あほう成事ながら、大坂にて一度對面したれども、當時の氣質男氣を便りにあわれなるかな。 〔むだ口〕 石どう丸爺を尋て高野へのほる。 〔頭取〕 東西くく。 〔北々〕 直々に御子息が芝翫丈の旅宅へ参られ、案内して取次のものへ内用のおもむきを

頼れた處が、芝翫子一向不<sup>レ</sup>逢に、取次にて段々の断いわれたとやら、夫で無<sup>レ</sup>據御きのどくな  
がら、道中二日路程ろぎんなしに出られたとサ。ソコで浪花の家内ハ大さうどう、獨りむすこ乃  
家出故、手代、別家中、上下とも手わけしてさがしニ出た。東武方へ尋に出た人が、よふく江戶  
入口にて御子息三逢、其まゝ返し籠にて大坂へ帰着致されましたとの噂じや。〔むだ口〕 それしき  
の事にながくとたいくつしたわい。早ふ芝翫の評をしたがよい。〔北五〕 夫三付此度芝翫丈帰坂の  
節顔見せに、まへに申御子息より、江戸表にて無心を言ふたとき段々の断尤の事、定めて其身を  
ひげしての断とおもふたとて、當大坂へ御帰りの後顔見せ積ものせんと、名古屋御領分鳴海瀉に  
て恨之介地のちりめん、白上りの千羽鶴の絞り「引替しわた入三十と富士見原の織屋にて、何  
やらおもわくの大巾のぼりを織せ、つ見ものせうと申された所が、別家中其外く々さし留られ  
たげな。〔皆く〕 其積物はどふしたのじや。おしい物じやナア。〔北より〕 そのしゆゑものを御子息  
焼捨たとやら、なくしたとやらいふ噂で有た。當時人氣をよくとる芝翫丈なれども、大躰無心  
ゆふ人柄でもしれそふなものじや。どふやらちとおかしふおもわれるテ。〔頭取〕 そこが何ぞの間  
違でハムり升ふ。どふて江戸芝居中には大立ものじや故、無心に来る人も多ふムり升ふ。夫に  
一々相手になり、無心を聞ふならたまる事ハムり升せぬ。逢ぬといふ爰の事、取次衆がふてう法  
でムり升。〔皆く〕 これハ尤じや。しかし御子息さまハ御なんぎで有たで有ふ。サアく早ふ跡評く。  
〔ヒイキ〕 なんでも子エ事でひまか入た。こちらの親玉ハ狂言の作も出来、ふり付も巧者なり。何から  
何迄頓与抜目のないぞ。〔南五〕 狂言斗りじやない。近頃ハ足迄が達者になられ、今度の帰国ハ難  
波新地乃文里さんと同道にて、駕籠にも乗らず帰られたとの事。〔芝いてんぐ〕 道中でハ市兵衛  
と「変名して、柳ごうりかたげて下男と成り、江戸出立の砌りより、顔にハ紅粉から塗て色を黒  
ふ見せ、素人になりて戻られたとの事。〔江戸者〕 江戸登りや名古屋戻りの役者が、からだに彫  
物書たりする事も、後にハ手を見らるゝで有ふ。〔芝い好〕 いつも通し駕籠乃芝翫丈か其様に歩行  
て戻られた故、双蝶々に米屋場の立廻りきつう足の悪イ様子で有た。今度の乗込ミも、先年のや  
うにばづむで有ふと楽しんで居たに、乗込かなふて残り多イ。〔ヒイキ〕 イヤ又先年の乗込にハ手打  
連中ハ勿論、道とん堀のいえ中藝者店いろくの趣向ヲはづまし、其うへ守り連中じやの〔駒図〕連中  
のと群れくから我へとちよつた事故、あのよふな乗込ハ道頓堀初つてからない事じや。〔老人〕  
イヤそふもいえぬ。尾上菊五郎が江戸から登つたときの乗込、けしからぬ事で有たが、此親仁か  
口で斗りいふてハ、今の若イ衆ハ、エ、何ゆふやら、よい口ナ事と誠にやせまい。どれく、トいいく、  
懐中右梅幸集一冊取出し、皆の衆これ見やしやれト本を開。

●安永三年、大阪へハ三十三式年ぶり、十月廿六日の乗込の勢ひ花々敷、川舟乃鋸りも艤おび  
たしく、牽頭并二所の若ひ者」も別舟にて出迎ひ、向ひ出る舟ハ前以て言ひ合せ、船幕乃染立艦



にハ吹貫幟などかざり立て、はやしものして賑ひしに、船陸とも人群集、いふも更也。此後大坂乗込の迎ひ船は凡幕幟なども用ひて、是を賑ひの例の始ともなりし程の事ぞかし。○

ナント其ころも多らかつたと見やうかな。**若手** エ、とかく年よりといふものハ。イヤまへの吉右衛

門ハ一生尻からけた事がないの、やつしなら彦四郎の事じやなど、四五十年も昔の事をいふ。今言たとして間に合ぬ。**ヒイキ** 乗込ミハ梅幸かえらかつたにもせよ、芝翫丈か太左衛門橋すじ八ま

ん筋の角屋敷を買ふて立派な普請も成就して、文化十四年正月八日に店開き、人参百奇圓并加賀の銘産御所落厂、買人ハ誠ニ門前に市をなしたわいな。**南** 文化十年の秋心齋ばしすじ

①太屋のむかへ芝翫香のびん付屋の店出しもえらかつた。**頭取** 役者衆中軒を並ぶる嶋の内とは申せ共、町方の内儀達、娘、下女に至迄、かゝ屋と岡嶋屋の内をわさく見に廻られ升。」

**モサ引** 三井の呉服だな、虎屋のまんぢう、南御堂に新町のあげや、砂場の和泉屋、あみだ池見物する田舎道者も、かゝ屋と岡しま屋の内を覗ていなねバ、国元へ土産にならぬとの事。**わる組**

かゝやの店見たら、国へのみやげにも成ふか、岡しまやの新屋敷の見沢店見るやうに、堺格子乃入た古風ナ表付、役者の内とハと見へぬ。**南** 芝翫丈ハ何ても人に見せる事がきつい好ゆへ、

惣稽古でも、初午芝翫でも、町方から我へト見に来るやうにしたハ、此お人から初めたやうなものじや。其うへぶたいの狂言でも声の懸るを悦び、おとなしい見物斗乃日ハと聲か懸らぬと淋

し□られ升。**立花組** (23) りくわん丈の芝居は女子の見物か多ひによつて音なく、芝翫の見物ハ男が多ゆへ場かやかましいわい。**古美者** 元祖嵐小六ハ、初日に見物の誉た所ハ抜き、又二日目に誉

ル所ハぬきして、幕を引てから嶋伊面白かつたと感ずるやうに致されしハ、これ見ざめのせぬ工夫、又上るり大夫有幡大和は、度々見物の誉る日あれば、床よりおりて腹を立、不作法ナ見物じ

やといわれたけなど、此様ナ事いふと、又お若イニ嫌われるで有ふ。**頭取** 芝翫丈の細評ハまださまく珍説もムり升れど、長居ハ却て御退屈、京扇屋の玉之介丈、江戸表よりつれ帰られし駒

之介丈、いつれ劣らぬ大建者の茅生、芝翫丈ハよいお息を持ってムり升。**玉ヒイキ** こちの玉さんハ、きりやうと言、藝といひ、殊ニすぐれて所作景事のやわらかさ。**駒ヒイキ** ソリヤ同じ事、景

事所作ハしる通り地藝にはしこき事、殊ニ親玉によく似た氣質、地藝の息込イキミせんだんハ二葉よりかんばしと、いかな大舞臺をも苦にせぬ氣質、さきへくと進ムいきほひが見へて有ぞく。**玉ヒイキ**

ヤレこちのく。もふ芝翫丈璃寛丈の跡に並ぶ役者衆もあるまいとあんじて見たかひ有て、俳優乃家ハまつく繁昌、やがて親玉ニ劣らず名をも世界ニあぐるて有ふ。**玉連** さしづめこちの玉さん

が親玉の跡つきく。**駒連** イヤく大たんの気性ハさしづめ駒さんと極ツタく。**頭取** ア、申々これ又どふした事でムり升。御子息達乃評判ハヒイキ連中の氣質ハ「近日評を催し升ふ。**橘組**

早ふ岡じま屋の評を初めさつしやれく。

正風 園 (24) 嵐吉三郎

**借者** いかしま璃寛子に正風の号を冠らしめた八理の當惑、夫二付吉といふ文字の有かたき事を演舌仕らふ。吉の字は字数三方二千餘字とて、京乃三十三間堂乃佛の数より多ひ、中にて吉の字を最上の文字といひ、易道にても元吉と置きておもき事也、人倫の品々様々有といへとも、士といふもの上中下へ通達して、人倫の本道を得たるもの。 **待** 成程待たるもの、口より出す一言に、よからぬ事ハ一ツもない、それ故士の口と書て吉といふ文字に被<sup>レ</sup> 成たしやないか。 **頭取** 吉の字ハ有がたい文字なればこそ、評書位付にも上上吉に至るを役者衆中の手柄と致し升る。 **南** 吉の字ハ結構な筈じや。岡しまやの三吉香ハ五痔脱肛、ひゞ、霜はれに奇妙じや。 **藝者** 橘香敢ハ二日酔ニふり出して飲とよふき<sup>ク</sup>升。 **女中連** 岡島練りつかふと、小倉屋の鬢附ハ遣われぬハイナ。 **仲居連** 小倉屋のひん附ハ嫌ひじやけれど、小倉染の縮めんの半多りにしても装束にしてもよいわいなア。 **④手代** サアそれ故大分仕入升がよふ賣れ升。 **④手代** 當春りくわんさま京上りニ付、彼地の御ひいき連中々、芝居の大幕と揃への手拭うこん色にふせん橘の紋てゝり升が、小倉の色昏の狂言故、三吉狐色とも、うこん橘ともてはやしまする。 **リクツ言** 小倉の狂言故三がい立花の紋を付よふなものじやニ、ふせん蝶ハ孚源氏の時、飛軽て初て用ひられた紋じや。

**手代** アリヤ平家の紋のふせん蝶に似せた物てゝり升。 **ほり** 其時から堀江の嶋にのりつね講といふて、藝子や、おやま茶屋、置屋のヒイキ連中が出来た。 **頭取** 其外北辺には璃寛連と申があら

れば、京都四条の川東に、橋組と申て鶴組に劣らぬヒイキか沢山にゝり升。 **南** 璃寛連々ハ床刀の簾ミナいつとても立派ニして送られ升。其外棧敷かけの聯も淡路丁船場丁の清水さんの大きなお世話。 **ツルウ** ア、コレく清水さんくとい伊介の事斗りいふて貰ふまい。今でこそ璃寛ヒイキ、芝

翫ヒイキとて連中の群々か出来たれと、其以前、ア、いつやらで有た トナオモヒ ヲ、それく、文化

四年の頃、璃寛丈に故障の事が有て暫らく道頓堀へ出勤なく、其後もめ事も済んだ角の芝居へ出られた其時ハ、からだわちるさいが、此男がかたぬいで、ヒイキ連中いひ合、のほりを沢山に送りました事がある。其後芝翫丈へ数本の幟を立るやうにしたも、マアわしが元祖じや。 **ヒイキ** 芝翫丈にもいろくの幟があれど、塩瀬の幟と市場の唐木綿の大幟ハ璃寛丈のいさほし、外ニ類なしじや。

**むた口** 其ひいきのつよい此大坂で、引ついて芝居を打テバよいに、芝翫丈ハとかく芝居をよくつゝけてさつしやるから木戸表方のよろこびじやといふ升。 **江戸** 最前芝翫の評のときもいふたが、一度も江戸へ下へらぬ璃寛のヒイキするほどふか芝翫の思わくもいなものだが、イヤおら斗りでもない。吉原のおいらん粧ひも、璃寛の噂を聞及び熊坂乃時かつら雉といふうたを送り、大坂でも其替歌を拵へて、きつく流行たとある、これらが誠のヒイキといふものた。 **ヒイキ** ソリヤなんぼニ芝翫が

ゑらひといふても、江戸へも行ず唯一トすじの藝を立通し、生立の大立者大哥舞妓の役者ハ此人だ。夫に當時のかゞやト一口にいわれぬわい。[江戸] 何馬鹿やろらめ、生立の大哥舞妓など太平楽をいやがる。其大立者が今生立のめい上りの鶴さんとかたせを競て、何のかのといやげいぶんだとおもつていやがるか。藝道修行乃為た。大芝居小芝居の頓着ハし子エ。今のいきほいを見ろ。あまり廣言はきやがると還つて立花のふげいぶんだヨ。エ、かげんにちよつくばつて居ろ。

[京より] あの人さんがたはちまきでやいと人じゃそふな。[江戸] 何はちまきでやいだ。とんだ事をぬかしやがる。芝居ハ何とおもつて居やがる。陽氣の為だゾ。夫にエ、衆様だのと音なく淋しくして人躰がつて居りやエ、かとおもつてあきれラア。閑情を好やろう等ハ奥山這入て抹香のかざでもくらつたがエ。[頭取] 是ハけしからぬ。おまちなされ升。[うかもれん] かつらをの哥ハ陽氣でよかつた。

アダタ

見ぬ恋に イキタこがれ 浪花の花山あらし」

スキタ

ト諷ふ。[若手] エ、やかましいわい。りくわんが熊坂ハ京大坂で大當りじや。[芝い好] 中の芝居の熊坂の看板ハ嶋の内の八まんへ絵馬に奉納、娘かけきよの看板ハ天王寺新清水へ奉納して、岡嶋氏と記してある。[京] 猿廻しの絵馬ハ京の清水へ奉納して有る。[芝居好] 其さる廻しで思ひ出した。

岡嶋屋のは次分ハ幾度見ても飽ハない。有田唄の声のよさ、  
おさるめでたや 目出たやな

[樂ヤシリ] イヤそれ斗りじやナイ。ツイちよつと端シリヤ長歌諷われてもよい声じや。アノ声が(25)鈴木左橋にやりたい。[ヲダテ] イヤ左きつハ声々酒飲して貰ふ方がよからう。[ヒイキ] 芝翫斗り狂

哥や發句が出来るじやない。岡嶋やも面白ひ事じや。前かた紀州行屋宮内乃道の記ハ摺ものが出たわい。[板木ヤ] 夫ハ(26)故璃環丈の卅三回忌の摺ものハ仰山でよかつた。[本ヤ] イヤまた夫々仰山ハ其佛事ニ松屋町の本利からの進もつ、釣臺いつぱいの紙袋へ極上々の日向椎茸入て、看板着た男に荷なわせ、心齋ばし筋を練り「物乃やうにして通つたもおかしかつた。[北五] いか様本利

といふ男も、大の璃寛信仰で、尾張ミやげの矢立に小刀からのり入の仕込たを、璃寛好じやとて諸方へ見せ歩行れた。[本ヤ] 今でハ心齋橋の詰に矢立店が三四軒も出来、本利カ璃寛好じやといふた矢立カ沢山に仕入て有ル。[ハルロ] りくわん好乃菜籠ハチト役者にハ似合ぬ事、どふか當振舞に往て、硯ぶたたや鉢の有(肴カ)を持って戻るゝかと思われる。[頭取] 成ほどそふ思召も道理、ソリヤはまやき迄むしつて戻る役者衆もムれ、大建ものゝ世界にてハとんとな事、璃寛丈の好は菜籠でハムリ升ぬ。マアちよつとした獨り前の弁當、または菓子入、腰へさし込ムすつぽんも拵てム

り升。其時の酒の肴入ル積り、それを菜籠じやといひ出したへえらい間違じや。**北より** 其菓子入で思ひ出したて、人の見る前でほりく、喰て居るへ扱々不躰ナ事しや。**女中連** 璃寛さん乃内の

咄し聞ふと楽しんで待て居るのに、何じややらすつほんじやの菜籠のと、あけくの果にはヨウさらへ講て見る面白イ鬚の鶴ウとやらいふ人が、菓子「喰ふのが璃寛様の評かへ、わたしらへそんな事聞にや来ませぬわいな。」**皆く** コリヤそふ有そふナ物じや。**ヒイキ** 頭取早ふ岡嶋屋の評ハどぶじや。

**頭取** 成ほと何れも様の御待兼も御尤、璃寛丈ハ生得律儀篤実なる氣質故、諸方のヒイキも強く自然と備る人徳有て、北辺乃旦那様は申及はず、京都、名古屋、其外のヒイキくより送るゝ進物、誠二山海珍ぶつに飽満チ、名月に椿を見る話斗、歓楽の身分といへとも、其身は質朴を専一とし、朝ハ未明に家内の下ぬうちに庭のしつくい場を洗ふたり、諸方から来た進物に懸た水引を湯のしして亦々餘處への進物に懸られ升が、コリヤしゆミでハムリ升ぬ。世界の冥加を思ふて致され升事でムリ升。**清水** さ様く其内水引と申物ハ随分大せつに致されるがよいて、我等の旦那先キ米屋の某ハなまこ袴の久三つれた身からても、途中に水引か一筋おちてあつても拾ふて袂へ入られ升か、則これと同日の論とヒイキ口でいふのじやない。ちやらなし大しんじつてムリ升。**ムタロ** 朝ハ未明におきるといふたまゝの事か、二日酔して芝居の始りのおそぬい事ハ度々の事じや。芝翫丈の評場でもいふ通りじや。**楽ヤシリ** りくわん丈ハ内に居らるゝときも、又楽屋入致さるゝにも、けつかうな数珠を片時も離さず首にかけて居らるゝを、えらい有かたやじやと人ハおもふか、岡じまやの心ハ又格別な物じや。家内の召つかひ下男も下女も、どふて役者の内へ奉公三来るもの故、マア面白いの浮気が多く、口入屋でもわたしや岡嶋屋へ往て見たい。給銀ハ何ぼふても大事な。

璃寛様の顔を毎日傍で見たいなどいふて来る程の者ゆへ、篤実ていねいな親方の氣二入ふ管もなしと有て、強ふ呵ツたり、かす喰したら、出替り時にも成らぬ先きに飛で出て、ぶたいと地とへえらい違ひじやとわんざんいわるゝがいやさに、何事も見て見ぬふり、いゝたぬ事もいふまいとて、首にかけられた堪忍の数珠を守ると言地口でムリ升。**筆者曰** ぶたいと地とえらひ違ひじやとハ余におこがましい。よしにしてもらひたい。**南** 岡嶋屋ハふたいの狂言斗りじやない。内にさへ通さぬ場として、「芝居の懸合に来る人通るべからずと張紙出して有に、芝居方が困るわい。

**頭取** 其儀は近來多病にて、始終りうゐんにて胸がつかへ、または背が痛など致ス故でムリ升ス、

**皆々** 舞は千代ませ千代ませと 栄へる宿こそ目出度けれ、

文政三辰年 正月吉日 作者 五文舎一笑

- (1) 摂陽奇観四六卷 文政二年十月の項に、「此頃 紅毛渡り更紗目鏡流行」、説明に「大坂にて贗物多く製ス」
- (2) 摂陽奇観四六卷 文政二年七月「當世見聞謎づくし」：順慶町の坐禪豆「同四五卷 「世上流行 座禪豆店」
- (3) 役者世世の接木 「此人二代の内に女千人の願を聖天宮へかけしおうせし人なり」
- (4) 摂陽奇観四六卷 「文政二年二月 天王寺開帳二付大坂市中より寄附物夥しく種々の趣向あり此節蝶々くといひてうかるゝ事大ひに流行ス別而道頓堀大かぶきちう芝居の役者花美に立出これを又見んとて見物群集ス」 歌舞伎年表 「文政二年二月 役者天王寺へ蝶々くといひて、うかれ行。」
- (5) 歌舞伎年表 「大芝居 中芝居 子供芝居 役者内儀見立相撲」(文化八年) 「行司 二左衛門 いま」
- (6) 役者世世の接木 初代市川団十郎は、宝永元年春市村座の舞台で生島半六により刺殺される
- (7) 摂陽奇観四六卷 「文政三年正月西高津新地三丁目小島屋専助かしや堺屋力松同居歌舞妓役者片岡松江孝心に付御ほうび鳥目三貫文被夢下置務」
- (8) 摂陽奇観四六卷 文政二年五月 西高津新地九丁目大野屋善右衛門かしや 高津屋太七同居かぶき役者百村紋九郎 當卯三十六歳 祖母 妙清 當卯百二歳 手當米十俵被夢下置務候(編者曰ク原本此ノ所老行空白) 「文政二年七月 當世見聞謎づくし 百村門九郎の祖母さん…百よりうへじや」
- (9) 役者世世の接木 「辞世 けふも夢寝ても起てもゆめの夢 ゆめに夢見る夢の世の中 三代目市紅 門人市川市藏爾後に元祖蝦十郎師恩を思ひ千日竹林寺に石碑を営む事奇特千萬也又俵團三郎團之介の兩人は江戸出勤ゆへ兄團之介は叶わざる事有てしばらく延引なれど弟團三郎は取ものも取あえず上阪為て追福の宮怠りなく遊行寺に辞世を彫刻して石碑を建る」 摂陽奇観四四卷 文化五戊辰十月九日 「市川團藏死…：釈了西下寺町遊行寺ニ墓あり千日竹林寺にもあり けふも夢寝てもおきても夢の夢夢の夢見る夢の世の中」
- (10) 歌舞伎年表 文政二年正月 大阪(角) 『錦の蔦かづら』傘の一本足(三五郎) 三五郎角にて傘の一本足／ 摂陽奇観四六卷 「文政二年七月 當世見聞謎づくし… 来芝の景事…：足一本で當つた」
- (11) 摂陽奇観四六卷 文政二年十二月 「嵐三五郎大西芝居へ出勤…：給金正月分七拾兩前金五十兩二月の手付 三拾兩都合百五十兩請取出勤尤蔵衣装也」
- (12) 摂陽奇観四五卷 「文化年間 牽牛花流行 文化七八年の頃より雅俗となく牽牛花を翫ふ事盛んに成行寛永の大菊元祿の百椿近くは寛政の橘に百倍ス…：文化十四年丑ノ秋 浪花牽牛花珍藏家品目」等／
- (13) 玉つくし 文化十三年子の夏大新板(一枚摺) 「すまふ好 浅尾奥山 中村哥七」
- (14) 土卵先生 富土卵(一七五九〜一八一九) 狼狽窟主人 従五位に叙された公家、東山在住、俳人、大衆文化に対して広範な興味と深い関わりあいを持ち、役者評判記や戯作を著し、俳諧、狂歌のサークルでも活躍。歌舞伎役者の最頂であり、璃寛等の俳諧の師匠でもあった。
- (15) 摂陽奇観四六卷 文政二年七月 「當世見聞謎づくし…：籠細工の釈迦」 摂陽奇観四五卷文化
- (16) 三代目中村歌衛門 安永七(七七八)〜天保九(一八三八) 本名大関市兵衛 俳名芝翫・梅玉 別号百戲園 狂言作者名金澤竜玉 屋号加賀屋 実父(初代中村歌衛門)は、「容貌の醜くかりしたため」役者にする事を望まなかつたと三世中村仲藏の随筆に見える。父親に内証で出演した子ども芝居での人氣が契機となつて役者の道を歩む。この時期「首振」芝居で人形遣いの名手文三郎の薫陶を受ける。十六歳で大芝居へ出勤。体矮小で容貌も甚だ上がらず、口跡もまたしゃがれ声で、時として含み声であつたというが、弁舌が極めてやかであつたことから、「歌右衛門は男前は悪いが、芸が上手」をいわれ、先輩で容貌にすぐれた二代目嵐吉三郎(璃寛)や江戸の

三代目坂東三津五郎と覇を競った。あらゆるタイプの役柄をこなし、地芸・所作のいずれにおいても七変化を演じ、元禄以来の一人一役柄の枠をひろげ、「兼ネル」の称を受けた。又師としてすぐれ、多くの若手役者を成功に導いた。教養層にも多数の最貞を持ち、彼を賞賛する本・摺物・画帖などが作られた。

(17) 妙妙戯談 「先年加茂の翁より吉野貴氏の脚色帖中へ送られし狂哥に 天台の止観へ四明中村の芝翫へ芝居加賀屋かしける」

(18) 手前味噌 「歌右衛門の伝」／『歌舞伎年表』文化五年五月五日より中村座「二本桜」の項「文化見聞集」収録

(19) 歌舞伎年表 文化五年 九月 大阪(中) 『舞扇南柯話』南柯夢『六馬琴の作を直す』十一月「大阪(中)かほみせ』嶋巡月弓張』…馬琴述、北斎画の摺物出来る。江戸本所松坂二丁目平林庄五郎版…余が初著述の稗本「弓張月」に据て、浪速中の芝居の顔見世、今年茲仲冬十三日より、新に場をひらくとて聞えしに贈るとて、かつしかの翁の画るまゝに、書肆平林堂の需に応じて、曲亭馬琴の部並書」／『瑠寛花橋』に、文化五年(中)『舞扇南柯話』赤根半七・丹波市『嶋巡弓月』張『鎮西八郎、文化七年・十一年』舞扇南柯話』と記載

(20) 撰陽奇観四五巻 「子のとし春大新ばん 芝翫離寛はやり物見立勝負附」／「最貞芝翫年代記大成」玉つくし文化十三年子の夏大新板」(一枚摺)に芝翫にちなんだ商品収載

(21) 中村歌右衛門 錦面姿 下巻 七変化の所作「その時につかふた扇はわざくその大坂へあつらへにおこし 平野町の鶴卯といふ末広師がこしらえたので斬り升」／撰陽奇観四五巻 文化十一年「今年 日の丸鉄扇流行 これは當春中の芝居三而中村歌右衛門…用ひしゆへ男子は勿論遊里の婦人等迄専ら日の丸の扇子をつかふ」

(22) 『梅玉余響』天保九年猿笠著に、「狂歌は蜀山人にとひしが浪花にかへりてより鶴廼屋翁または六々大人に随ふてまなぶ」蜀山人は三津五郎の最貞で、初めは歌右衛門を嫌い、文化八年翫柳主人宛書状に、歌右衛門を「上手なれども江戸者の風上に可置ものに無之…上方役者、上方儒者、皆々大嫌いに候也」けしからぬ不作のげけもの見物」(歌舞伎年表)としている。坂東三津五郎と二人奴上演の際、芝翫を始めて見物にきた蜀山人の座敷へ挨拶に行き、「大和屋と加賀屋と二人奴らさ…この句を貰う。以後蜀山人は芝翫の最貞となった。

(23) 歌右衛門錦絵姿 「岡嶋屋を最貞するは、多く女が勝ちます。歌右衛門は不男ゆえ、娘や内義はさほどには思いませぬども、狂言の仕打に巧者面白味を見ようなら、なかなか嵐吉と一口にはいわれませぬ」

(24) 二世嵐吉三郎 明和六年(二七六九)〜文政四年(一八二二) 岡島屋離寛 初世の実子、長男の嵐猪三郎を置いて二世を襲名。二二歳で大劇場に出勤。終生立役を専門とする。『役者世々の接木』に「近來か程まで揃たる役を見ず。第一美男にて、其の上美形にて、上品で、まづ近世の稀人なり」と評される。文政四年甥大三郎に璃寛の名を譲り橘三郎と改称するが、間もなく死亡。舞台が綺麗で女性に人気があった吉三郎と、凝り性の演技派で女人好みのする歌右衛門との不仲は有名で、『芝翫隨筆』『撰陽奇観』には、吉三郎の歌右衛門に関する訴状(芝寛最貞の戯作ともいう)が収載されている。後年最貞連中が仲介し二人を和解させ同座が実現する運びとなったが、吉三郎が急逝し実現しなかった。

(25) 歌舞伎年表 「文政元年正月(中)…長唄 鈴木左橋」／「文化三年七月(角)…長歌 鈴木左吉」等

(26) 文化九年十二月 佐藤益之絵 日英交流大坂歌舞伎展(大阪歴史博物館 二〇〇五刊) 一五二頁

参考文献・関連資料 近世の出版物における○内の数字は中之島図書館の請求記号

- 『保古帖』<sup>書影</sup>「芝翫年代記大成」「芝翫ひいき道中記」「芝翫国一覽」「玉つくし」等一枚摺(甲雑六八)
- 『役者風俗三國志』別書名役者三國志 花笠文京編 天保二年 大坂 河内屋太助等四書肆刊(九七二/八)
- 『中村歌右衛門 故郷へはれの錦画姿』八文舎自笑著浪華 河内屋太助 文化九年刊(九七一/七〇) 朝日九七一/一四
- 『俳優世々の接木』別書名<sup>三都</sup>俳優世代の接木 俳優堂夢遊著 文政十一刊(九七一/一三) 朝日九七一/三三(安政六刊)
- 『梅玉余響』猿笠翁編 大坂 河内屋太助 天保一〇年刊(九七二/一三二)
- 『加賀屋 芝翫栗毛』浜松歌国編 大坂 河内屋太助 文化十一年刊(二五五・八/一六) 朝日二五五・八/六
- 『道中記 芝翫帖』芝翫帖 浜松歌国編 狂画堂芦州模 文金堂 文化十一年(九七一/六二) 朝日九七一/六〇
- 『滑稽道中雲助噺』滑稽道中雲助噺 大阪 河内屋太助刊(二五五・八/二八)
- 『滑稽 花競二卷噺』天保五刊(二五五・九/五〇)・璃寛花競 文化十一年刊(二五五・九/一〇・七六)
- 『芝翫節用百戲通』曉鐘成編 狂画堂蘆州画 文化十二年刊(九七一/五〇) 朝日九七一/一六
- 『芝翫百人一首玉文庫』曉鐘成作・画 大阪 河内屋太助 文政二年刊(朝日九七一/一七)
- 『芝翫隨筆』写(甲和三四二)
- 『芝翫隨筆』滑稽文人著 写二篇(朝日九七一/三二) 下卷欠)
- 『四天王大坂入』八文字屋自笑著 江戸 鶴屋金助等 文化十二年刊(九七一/一〇二) 朝日九七一/一五
- 『浪花土産初物語』式亭三馬著 するがや半兵衛 文化五年板(朝日九七一/二五)
- 『中村芝翫 返咲浪華の裡梅』二世立川焉馬著 歌川歌國画 西村屋與八等 天保四刊(朝日九七一/十二)
- 『中村芝翫 吾妻土産 妙妙戲談』南地亭金楽著 丁子屋平兵衛等 天保五年刊(朝日九七一/三一) 〇四一/三二六
- 『東都別 劇場訓蒙図彙』式亭三馬作 上総屋忠介助 文化三年刊(九七一/八二)
- 『中山由男一代狂言録』不二某編 天明二年刊(九七一/一〇)
- 『慶子画譜附録出世目録』八文字屋自笑編 大阪 泉屋卯兵衛 天明六年刊(九二一/六六)
- 『玉の光』別書名嵐小六一代記余祿 八文字屋自笑著 八文字屋八左衛門 寛政八年刊(九七一/七二)
- 『来芝一代記』浪華 綿屋喜兵衛 寛政九年刊(二五五・四/一〇)
- 『桐の嶋台』八文字屋自笑著 八文字屋八左衛門 寛政九年刊(九七一/九八)
- 『嵐小録過去物語』螭螂軒魚丸著 耳鳥齋画 浪華 綿屋喜兵衛 寛政九年刊(九七一/一六六)
- 『璃寛花橋』梨園山人著 (文化十三年)写(九七一/一六二)
- 不夜庵五雲編「梅幸集」上方藝文叢刊「四卷 上方芸文叢刊刊行会 一九七九年刊
- 三代目中村仲蔵著 郡司正勝校注「手前味噌」青蛙房 昭和四四年刊
- 伊原敏郎著「近世日本演劇史」早稲田大学出版部 大正二年刊
- 河竹繁俊著「歌舞伎名優伝」修道社 昭和三年刊
- 伊原敏郎著「歌舞伎年表」五・六卷 岩波書店 昭和四八年刊
- 松平進著「上方浮世絵の再発見」講談社 一九九九年刊
- 浜松歌国著 船越政一郎編・校訂「撰陽奇観」四・五・六卷「浪速叢書」五・六卷 浪速叢書刊行会 昭和三年刊
- 『日英交流大坂歌舞伎展』大阪歴史博物館 二〇〇五刊
- 藤井高尚・中村歌右衛門著 森銑三・北川博邦編「落葉の下草」日本隨筆大成「続九 吉川弘文館 一九八〇刊

早稲田大学演劇博物館編・刊』上方歌舞伎資料展―三代目歌右衛門の周辺』一九九六年刊

おわりに

大阪府立中之島図書館は、「正平版論語」を始め、町方文書、近世の出版史研究に欠かせない「大坂本屋仲間記録」等、近世の資料を所蔵、一般の閲覧に供している。また、そうした資料を広く利用して頂くために、「大坂本屋仲間記録」「遊遊従之」の出版、紀要への投稿等を通じて紹介してきた。

今回の「役者更紗目鏡」については、中之島図書館での講演会に関連して、荻田清氏にご教示頂いたのが始まりで勉強のために翻刻をしたものであるが、昨秋の大阪歴史博物館による「日英交流大坂歌舞伎展―上方役者絵と都市文化」の開催、上方演劇界を代表する名跡「坂田藤十郎」(三代目)の襲名等、中村歌右衛門関係の催しが続いた事もあり紹介することとした。